

敷田 麻実

### ③ ナホトカ号事故から幾年ぞ(1)

# 情報源 ネットが活躍

の話である。時が流れ、世纪が変わってしまったこともあり、日に日にナホトカ号の記憶は忘れ去られてゆくように感じる。15年間の県厅勤務では、大きな仕事をや困難な仕事をいくつもこなしてきてほしいといふ感じで、消防防災の仕事に興味を持ったのは、夜だった。タンク車が入ったのは、最初が入ったのは、まさに「あら」と、だった。

話でメールかやり取りでき  
る今では当たり前のことか  
もしれないが、ナホトカ号  
事故の際には、インターネット  
ツツが貴重な情報源になっ  
た。当時県のインターネット  
への接続は、情報政策課  
で扱いにくくなればじとや、  
揮発成分の消失と同時に毒  
性も減少することなどが、  
手に取るようにならなかった。  
この情報のおかげで、その  
後の対策でどれだけ冷静な  
判断ができるかしれない。

ナホトカ号が1997年の正月に島根県沖合で沈没し、そこから大量の重油が流れたのはもはや6年前だ。なしたつもりだったが、中でもこのナホトカ号事故は、自分の仕事の重要性や意味を思い知らされた。「ひ

対策の初期は情報不足が深刻で、何をしていいのかわからない。なのに長い正月休みで、国内機関とほんと連絡がつかなかつた。その「空白」にインター ネットが活躍した。携帯電

た。幸運にも水産課は、前年の国際シンポジウムのために、すでにインターネットに接続していた。オイルスpill（油流出）で検索すると、エクソン・バルディーズ号の記録のホームページが見つかる。事故を経験した今では誰もが知っているが、油が固化化

## タリビ



A black and white photograph showing a large ship on the right and a smaller boat with several people on the left, both in a body of water.

重油漏出事故を起こしたナホトカ号の船首部分の引き上げ作業＝97年3月、福井県三国町で（敷田さん提供）

が、その影響を否定しきれない。このような「灰色」の薬剤を使うか使わないかという判断で、「使う側」が主張するのは「有害性が科学的に証明できない」のだから、使用を止められない」という論理だ。また「証明できない危険性で、経済的な価値を損なうことばかりない」という責任論が出てくね」とも多い。いずれも、正当な論理に思えるが、過去の公害病や最近の狂牛病問題の例を見れば、それが「まやかし」であることは明らかだらう。

の影響も否定できな  
るような「灰色」の  
使うか使わないかと  
断じ、「使う側」が  
るのは「有責性が科  
証明できないのだか  
用を止められない」  
論理だ。また「証明  
い危険性で、経済的  
を損なうことはでき  
ところ責任論が出て  
とも多い。いずれ  
当たる論理に思える  
過去の公害病や最近の  
問題の例を見れば、  
「まやかし」である  
明らかだろ。